

19.

エネルギーソースの問題

発明を説明するために、研究者は3つのプライマリーエネルギー源を仮定した。

モレーは、スペースに広がっている放射エネルギー（エーテルの波動）を取り出していると思っていた。

多く（ブラウン、1987、モアランド、1997、Pereault、1999）は、モレーが彼の真空管で彼の検波器、陰極と誘電体を放射性物質と混ぜ合わせたことはよく知られていて、放射性エネルギーが主要な源であることを思っていた。

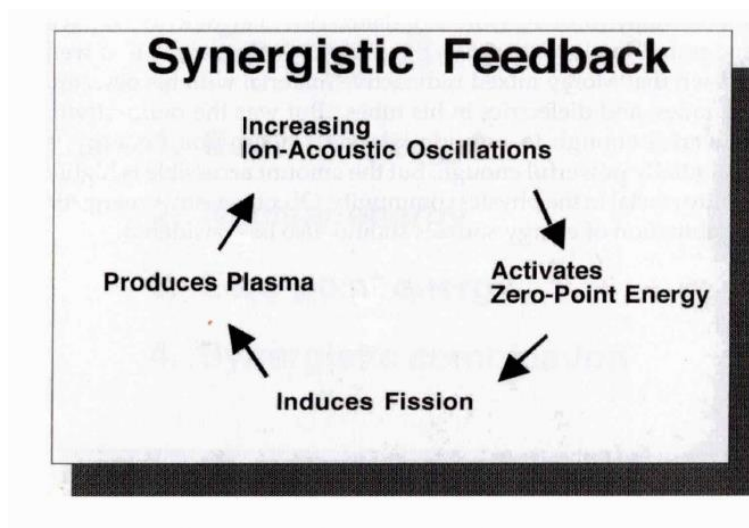
しかし、この放射能は、キロワットを提供するほど十分強力だったか？

零ポイントエネルギーは潜在的に十分に強力である、しかし、アクセスできる量は物理学コミュニティで非常に論争的である。

Of course, any synergistic combination of energy sources should also be considered.

もちろん、エネルギー源のどんな相乗作用の組合せでも、考慮されなければならない。

49

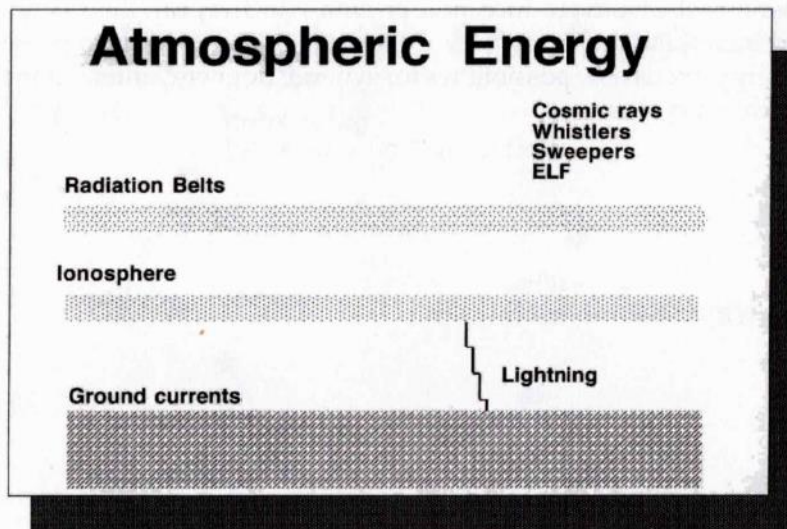


20.

フィードバックの相乗効果 Synergistic feedback.

双方向エネルギー・フィードバックの例が、例示される：

イオン音響のプラズマ振動は零点エネルギーをコヒーレントに起動させるかもしれない。そして、それはより多くの分裂を誘発することができる。そして、それはより多くのプラズマを生産することができる。そして、それはイオン活性を増やすことでプロセスを繰り返す。零点エネルギーとのコヒーレントな連結は、システムの中で相乗作用し、エネルギー相互作用の新しい可能性を開く。



21.

大気のエネルギー

確かに大気には、電離層と放射帯で起こっているエネルギー的な活動が、ある。

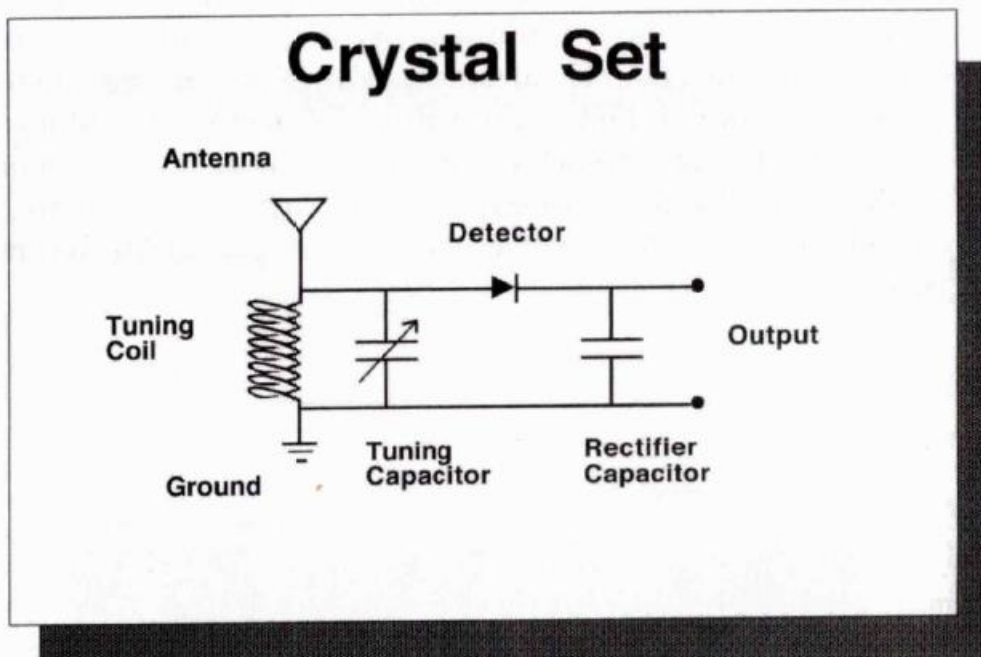
それは、稲妻、地表への流れ、ピーと鳴る **sweeper** 波、吹き払っていく波、太陽風と宇宙線を含む。

ホイッスラーとピーと鳴る **sweeper** 波は、速く彼らの振動数を変えて、電離層プラズマと放射帯で現れる。

ブロードバンド検波器 (モレーに適するものが使われている) はそのような波形を吸収するために必要である、しかし、特にアンテナとアースが不必要になった最終的な機種では、キ

ロワットの出力のエネルギーを説明するだけの十分なエネルギーの集中がそこにあるといえるのか？

53



22.

鉱石受信器 Crystal set.

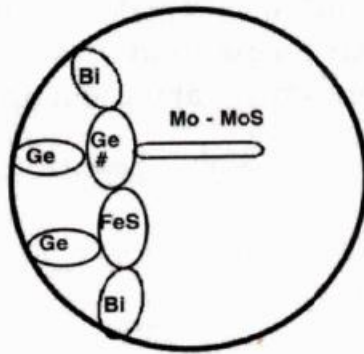
鉱石受信器は、エレクトロニクスの発展しはじめた年代の初期に、道楽者に人気があった。希望するラジオ局にチューニングするためにアンテナとアースは、可変コンデンサと誘導子につながっている。

一般的に、整流用結晶、点接触型ダイオードは無線信号の振幅を見つけるのに用いられた。モレーは最初の入り口にあるチューニング・コンデンサを取り外すことによって、彼が放送用ブロードバンド無線信号を捕らえるのに障壁の低いフィルタを効果的に作成したことを発見した。そして、それはエネルギーの波を環境から拾う。

モレーは、多くの努力を入れて来る波をよりよく調整してゲイトを拡大するために鉱石検波器を改良することに集中した。

23.

Moray's Detector



Bi - Bismuth
Mo - Molybdenum
MoS - Molybdenum Sulfide
FeS - Iron Sulfide
Ge - Germanium
+ Zinc Sulfide
Radium
Uranium
Thorium

The Sea of Energy, Cosray Research Inst, Salt Lake City, 1978, p70.
1960, p130.

23.

モレーの検波器。

モレーの検波器の技術の例は、彼の特許出願（モレー、1960）に記載されている。

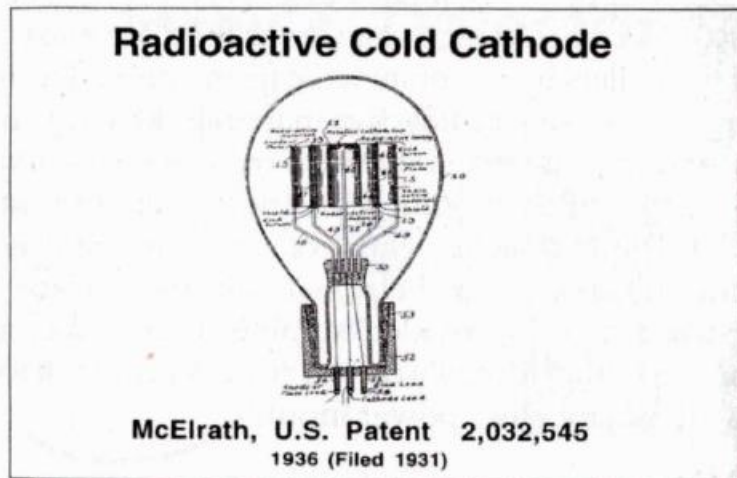
モレーは、1940年代後半のベル研究所のトランジスタ発見の前に、1920年代に適切なトランジスタ材料（ゲルマニウム、ビスマス）についてよく研究した。

モレーは、放射性物質を使うことだけでなく（鉄、モリブデン、亜鉛といった）金属の硫化物の使用によってペレットの表面で輝くプラズマを最大にするよう努めた。

モレーは、ラジウム、ウランとトリウム混合物が放射能を提供する点に注意したラザフォードの多くのテキストを誰よりもよく見た。（シェゴ、1981）

放射性放射物は金属の硫化物で発光を誘導する。そして、それは表面のプラズマを維持するのに助ける。

モレーの水晶のラジオ・セットが他からのパワー入力なしでもスピーカーを駆動することができるほど、入って来る信号をそれ拡大して提供したのは、それがプラズマであるからである。



24.

24.

放射性電極

エレクトロニクス of 年初期に、放射性物質で実験することは人気があった、そして、これらは化学物質供給元を通してすぐに手に入った。

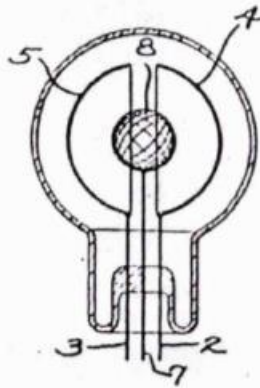
しばしば、そのような材料が、電子放出を増やすために、電極で使われた。

この点を主張して多数の特許が出されたが、(McElrath, 1936) それでも、彼が真空管で陰極を熱することがなかったという理由で、特許庁はモレーのエネルギー発明を拒絶した。

冷い電極放出真空管は、電極をカップで覆っていた

ファーンズワース、Farnsworth 米国の特許 2,184,910 (1939)

Cold Cathode Discharge Tube Cupped Electrodes



Farnsworth, U.S. Patent 2,184,910 (1939)

25.

Fusor の特許。

フィロ・ファーンズワース(1939) (テレビの発明者) は、プラズマに集中するために電極と放射性物質を特にカップ状に結合させることで、特許を得た。

装置は、ファーンズワースはそれが核融合から来ると思っていたように、異常に大きな状態を引き起こした。

彼の発明は、零点エネルギーの結合と、もう一つはプラズマの誘導された例によっていた？

26.

ブラウンの反響する原子力電池

故ポール・ブラウンの研究は、モレーの操作の信念を理解するために、おそらく最も多くの洞察と理解を与える。

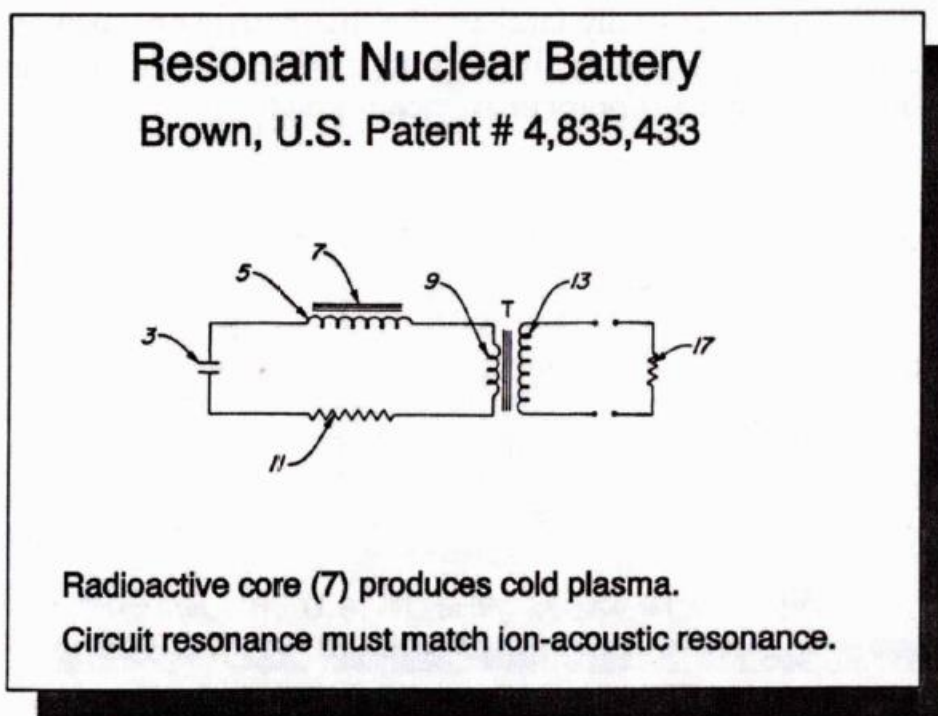
ブラウン(1997)は、単純な反響する (コンデンサ-誘導子) タンク回路が誘導子コイルを放

放射性放射物で攻撃することによって自己走行することができることを示した。

超過エネルギーが引き起こされる。そして、ブラウンは彼のバッテリーのために直流出力をつくるためにそれを整流した。

核放射能は発生したすべてのエネルギーを提供するのか、または、それは零点エネルギーを起動させるプラズマにイオン振動が触媒作用を及ぼすのか？

63



27.

ハバードの装置 Hubbard device.

ポール・ブラウンは、新しいエネルギー分野の歴史で2つの方法を見つけたことで残った：

1) つは、彼は歴史的に最初に自己走行エネルギー発明をした発明者アルフレッド・ハバード(1919年)をうまく複製したことである

2) は、彼は市場分野に躍り出る突破口を開くために誰とでもすぐ親しくなった。

ブラウンの特許は基本的にハバード装置の詳しい説明である、そこで、誘導子コイルは円形の構成で配置され一部の研究者がエーテルで渦の動きを誘導するかもしれないと仮定する。ブラウンは、彼の装置が弱い(1キュリー)放射性源、例えばクリプトン85またはストロ

ンチウム 90 から 5 ワットを作り出すことができる効率的な原子力電池であると賢明に、主張した。

1990 年に、私は個人的にポール・ブラウンと相談して、そのような弱いせいぜいわずか 5 ミリワット提供するだけのエネルギー放射能が、質量のすべて 100% 転換することによると、主張できるか、何人が質問したか彼に尋ねた。

1000 倍の出力は、ひどすぎる。

彼は 100 人のうちおよそ 1 人が問題を認めると答えた、しかし、さらに 2 つの重要な点がある。

ブラウンは、実は同じテクノロジーで 100 ワットの装置をつくろうとしていた。

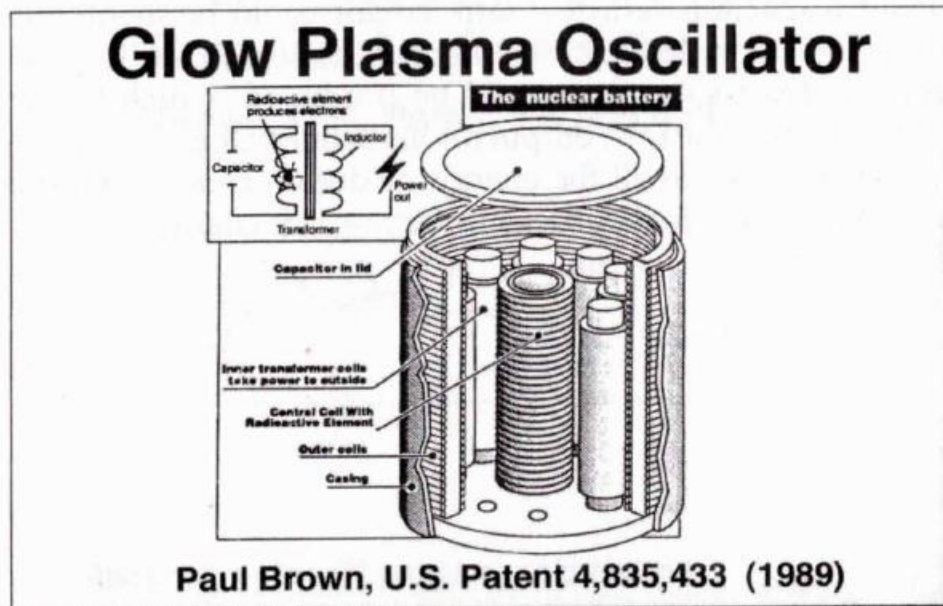
それは不安定だった、そして、時々、ワイヤーを焼き尽くすような、おそらくキロワット単位の電力の波が起こった。

彼は 5 ワットで装置を安定して動かすことができた、そして、彼の会社は更なる研究資金のためにそれを販売することに決めた。

ジェネラル・エレクトリックは、協力としてバッテリーを製造するため、十分な注意で、それを調査するために仲間の原子物理学者を行かせた。

ポール・ブラウンは、物理学者が過度のエネルギーを説明することができなかつたので、1 週間睡眠できなかつたと言った。

—ポール・ブラウンに隠蔽される問題が本当に始まったのはこの調査の後であった、なぜならば、彼が驚くほど単純な、自己稼働の、零点エネルギー装置をうまく作製したように見えたからである。



28.

零ポイントエネルギーの基礎。

広くエンジニアリング・コミュニティで研究されないが、零ポイントエネルギーは物理学者にとっては深くてかなり複雑な研究課題である。

スペースの組織に固有の非常にエネルギー的な、混沌とした、電気的な場の変動としてエネルギーが現れる。

「ゼロポイント」という名前は、そこには熱放射がないと言われるケルヴィン絶対 0 度由来する、そして、それはすべての物質と放射線（熱、光など）が不在で、純粋な空のスペースから成る。

変動は一部の物理学者がそれがすべての粒子とフィールドの基礎的な基礎で、そして、彼らの存在を支えると推理するほどエネルギー的である。(Senitzky, 1973)

物理学論文は、ZPE が量子効果 (ボワイエ, 1975)、原子安定性 (パソフ, 1987)、重力 (パソフ, 1989) と慣性 (Haisch, 1994) の基礎であるという意見を支持する。

要するに、現代のエーテルのための学説である、しかし、18 世紀のエーテルの静的モデルとは異なり、零点エネルギーはダイナミックな相互作用の機会を提供する。

Zero-Point Energy: Basis

Quantum Effects - Boyer, Phys. Rev. D 11(4), 2832 (1975).

Hydrogen Atom - Puthoff, Phys. Rev. D 35(10), 3266 (1987).

Energy Source - Cole, Puthoff, Phys. Rev. E 48(2), 1562 (1993).

Gravity - Puthoff, Phys. Rev. A 39(5), 2333 (1989).

Inertia - Haisch, Puthoff, Rueda, Phys. Rev. A 49(2), 678 (1994).

零ポイントエネルギー基礎 Basis :

Quantum Effects - Boyer, Phys. Rev. D 11(4) 2832 (1975).

量子力学的効果 — ボワイエ、フィジカル・レビューD11 (4) 2832 (1975 年)。

Hydrogen Atom - Puthoff, Phys. Rev. D 35(10), 3266 (1987).

Hydrogen Atom — パソフ、フィジカル・レビューD 35(10)、3266 (1987 年)。

Energy Source -

エネルギーSource —

Cole, Puthoff, Phys. Rev. E 48(2) 1562 (1993).

コール (パソフ) フィジカル・レビューE 48(2) 1562 (1993 年)。

重力 — Gravity -

Puthoff, Phys. Rev. A 39(5) 2333 (1989).

パソフ、フィジカル・レビューA 39(5) 2333 (1989 年)。

慣性 — Inertia -

Haisch, Puthoff, Rueda, Phys. Rev.

Haisch、パソフ、ルエダ、フィジカル・レビューA 49(2) 678 (1994 年).

。

67

29.

不確定性原理と電子対生成。

ZPE は、理論的に発見され量子力学の方程式の用語となった。

それはハイゼンベルク不確定性原理の根底にあるジターを提供した、そして、ディラック (1930)はそれを仮想電子-陽電子対の存在が (短く生きる) 急に消える所で、エネルギー的な乱気流の混沌とした渦がスペースに固有であると解釈した。

Uncertainty Principle

$$\Delta E \Delta t > \hbar$$

Pair Production



30.

量子重力真空変動モデル

物理学者は、量子重力として知られている最終的な統一場理論を構成するために一般相対性理論と場の量子論の理論とを結合しようとしている。

この領域（ストリング論を含んで、増やす）における最近の成功は、多くの物理学者を参加させ、引きつけた。

量子重力の基盤は真空のエネルギー変動である。そして、それは時空と物質を明らかにするために組織化される。

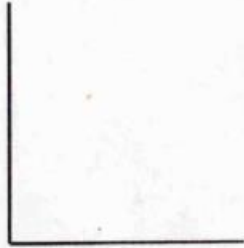
詳細なモデリングは、プランク長（ 10^{-33}cm ）でされた。

一つの真空変動をモデル化することで生まれたコンピュータ・グラフィックは、ここに示される。

それは、リー・スモリン Lee Smolin の人気の本（量子力学的重力場への3本の道）（2001年）からである。

Single Vacuum Fluctuation

Time 10^{-43} sec



Space 10^{-33} cm



Lee Smolin, Three Roads to Quantum Gravity, 2001

31.